

～ひきこもり整体師のひとりごと～

令和6年12月第37回

自己紹介:楠永洋介

小学校3～4年を不登校、次いで中学校1年2学期～2年生を不登校、義務教育期間中は正味5年程しか登校していません。定時制高校を卒業後、進学、卒業を拒否して祖父の遺したお金でネットスクールや、ワークショップ、FXなどを経験してお金を溶かしました。なんやかんやあって結婚後、2人の子供を授かる。現在、農業、整体業、塾講師等で生計を立てる。

皆様お久しぶりです。楠永です。今月もひとりごと始めていきます。

『増殖するシャーマン』に関するラジオを聴いて

鼯鼠にしているネットラジオでモンゴルにおけるシャーマン界隈で起こったある事件を解説していた。その台本作成にあたり、参考資料とした本が『増殖するシャーマン』と『憑依と抵抗』の2冊であった。そして、その配信内で切り出されたモンゴルで起こった事件とはシャーマンの増殖である。

シャーマンとは？

ここでざっくりと僕の認識を表しておく。シャーマンとは世界中に存在する憑依や脱魂を行い託宣を行う人で日本で言うところの巫女や青森のイタコ、沖縄のユタ等がシャーマンにあたると思っている。

2000年代前後そんなシャーマンがモンゴル国内でまるで感染するかのように増えていったそう。その背景には何があったのか？ラジオの解説はそこに始終し、全編合わせるとおよそ3時間にはなる。今回はその中でも僕に最も深く刺さった所のみを紹介しようと思う。なので、細かいディテールや、大きな背景は意図的に削ぎ落としたり、ラジオを聞いた後、なお調べて分かったことを元を書いていきます。その点をまずご理解頂きたいと思う。

モンゴルと近隣国の関係

恥ずかしい話、今まで知らなかったのだが、モンゴルがロシアと中国に挟まれた国であるということで、その歴史は近隣国との関係無しには語れないところである。そしてシャーマンの増殖は1990年代と2000年代初頭とに分けられ、こと前者の背景には僕自身、大きな事を言えば現代の生きづらさを抱えた人に刺さる部分があるのではと思えた。

何があったのか

そもそもモンゴルには純血思想+父系系譜への文化的重さがあった。先ずはこの尊重の話を少し紹介する。

モンゴルでは成人したら自分の父方の祖先を多い場合17代遡り暗唱出来ることが成人の証とされた。これは単に父系系譜が大事だからという理由だけではなく、純血思想により異邦人との混血を避ける場合一番危惧すべき点は近親交配による遺伝的疾患などである。その為の安全弁とし

て、父系系譜暗唱は働いていた。つまり同じ父系に属する同胞との交配を避けることが出来るのであった。

そんな中1930年代頃スターリンの指導による土地の収奪やロシア革命による混乱を避け生まれた土地を追われたモンゴル北部のブリヤート人達はその侵攻の影響による国外への逃亡等を「反革命的、日本のスパイ」という言われたい疑いをかけられ、粛清という名の大虐殺を被る。それにより当時ロシアからモンゴルに移住した男の半数は銃殺刑に処された。残されたブリヤート人の女は子孫を残すために「異邦人との間に子どもをもうける」か「婚外子を受け入れる」という二択を迫られる。

どちらにしても純血思想や父系系譜の観点からすると受け入れ難い選択でした。しかし自分達の血を絶やさぬために彼女たちはそのどちらかを選び、ブリヤート人には父系系譜を持たない混血児（エルリーズ）達が生まれる事になりました。彼等は1990年代初頭の社会主義崩壊後と急激な市場経済化による混乱の中、地域社会において「純血のブリヤート人ではない」とされ、魔女狩りのごとく差別や排除の対象となったそうです。学校や職場でのイジメ、それにより心身を病みその場を追われる事もあったようです。

シャーマンになるには

少し話は変わり、モンゴルの人々がシャーマンになる（これを成巫（せいふ）という）には3つの道筋がある、世襲型、修行型、召命型の3つであり、ここでキーとなるのは『召命型』である。これは超自然的な存在からシャーマンになる事を求められるタイプで、この成巫には巫病がつきものであった。『巫病』とはなにか？

当時の近代化著しいモンゴルにあっても西洋医学の病院はまだ少なく、おおよそ日本の広島県程度の地域に病院が5ヶ所もない状況でした。そんな中シャーマンによる託宣等を用いたいわゆる民間療法はそこに生きる不調を抱えた人達にとってまだまだ頼みの綱でした。

『巫病』とはそんな西洋医学でも治らず、その後シャーマンにかかっても治らず、どうしようも無くなった人達にシャーマンが処方する最後の処方箋でした。「貴方のその病はシャーマンになる事でしか癒せません。覚悟を決めてください」といったかどうかは分かりませんが、巫病となった人達は「死」か「シャーマンとして生きる」かを迫られます。

ここまでの要素をまとめるとシャーマン増殖のその『一端』が見えてきます。「ルーツを失い、アイデンティティを失った人々」、「それを迫害する社会情勢」、「それにより著しく傷ついた人々」そんな人々が唯一自らのルーツやアイデンティティを取り戻し、コミュニティに参加する権利を得る手段が『シャーマンになる事』でした（なぜシャーマンになる事がルーツやアイデンティティを取り戻す事になるのかはここでは省きます）。

この人達の事に思いを馳せると僕は本当に悲しく、また他人事では無いように思えたのです。「僕の事じゃないか」。と思えました。僕は『自分が自分で居ていい居場所』を探していました。それは旧世代に於いては『ルーツ』がある種それを担保していたように思える。「どこぞの人の子ども」「どこそこの村の子ども」というので保証されたアイデンティティがあったのであろうと思えます。

僕が育った地域は色んな所から集まった人達で構成されていて、祖父や祖母は近くに居なかったし、故あって父方の墓参りには行けない。生まれてこの方その事を「寂しい」と思ったことは無かったけど、ある時こう思った。

その土地で生まれ、育った人にはその土地に多くの思い出があり、懐かしさがあり、そこに住む人達に対しても思い出があり、懐かしさがあり、そんな連綿と続く流れの中に自分が生きている。と感じれるのかも知れない。僕にはその感じがうまく想像出来ないけど、僕が大事にしている物。欲しくて欲しくて堪らない物は『それ』なのかも知れない。だから僕は常に誰かに必要とされようとしているのかも知れない。伝統文化を保存しようとするのも、整体師になろうとするのも、良き夫であろうとするのも、良き父であろうとするのも、なんだか僕が今までの人生で得られなかった物を必死で取り繕おうとしているように感じれるように思えた。

「自分によって自分の居場所を作ろうとしている。でもそれは別に望んでやっているだけではなく、境遇上それをせずに生きるのは辛すぎるから」。という自分と、モンゴルで巫病を患い、シャーマンとして生きる事を決めたブリヤート人はなんだか共通点があるように思えるのだ。

※今回のひとりごとは自分が『面白い！！』と思った所だけを書くために事実の大幅な省略や改変を行っています。上のモンゴルのシャーマン事情に興味を持った方は是非島村一平氏の『増殖するシャーマン』や『憑依と抵抗』を読んでみてください。



ここで生きて

御案内

感想、質問頂けると励みになります。また仕事の依頼（整体等）頂けると生きる糧になります。整体に関してはホームページ等覗いて見てください。

緑陰整体指導研究室

ホームページ

<https://ryokuinseitai.business.site/>

ご意見、ご感想、ご依頼は下記にお願いいたします。

電話番号

090-4979-6409

メールアドレス

ryokuin.seitai@gmail.com